

「源頼実集」注釈稿上

吉田 茂・田中拓也・金子節哉・塩屋貴之

凡例

一、底本には榊原家所蔵「源頼実集」（『榊原本私家集三』日本古典文学影印叢刊11、財団法人日本古典文学会編集、貴重本刊行会、一九七九年）を用いた。

一、本稿では、「源頼実集」全一〇三首中の1〜52までの歌を扱う。

一、本稿は、本文、【通釈】、【語釈】、【参考】の項目を立てて記した。

一、本文は底本を翻字し、それに濁点、句読点を施した。翻字を優先したので、必ずしも歴史的仮名遣いに従っていない場合もある。

一、本文において明らかに誤写と思われるものは、囲み文字で表記し、

【語釈】でその旨を触れた。

一、【通釈】は、詞書・和歌を通釈し、意味を補った場合は、（ ）でそれを示した。

一、【語釈】は、語句に関する注釈および本文の校訂を記した。語釈を施した語句は、「○」を付し、見出し語として本文を掲げた。

一、【参考】では、【語釈】で論述しきれない問題を、【参考】を設けてここに記した。特に問題ない場合は、【参考】を立項しない。

「源頼実集」注釈稿上

一、【語釈】、【参考】で引用する歌は、原則として『新編国歌大観』

（角川書店・CD-ROM版）所載本文を用い、仮名を適宜漢字に改め掲載した。引用文献の呼称は、『古今集』『躬恒集』などと略称で掲げた。

故^中左金吾家集 源頼実

春

三月三日、ある人の家にて、花見くらしして、をのくさかづきとりてよめる

1はなをみる春はやみだになかりせばけふもくれぬとなげかましやは
【通釈】三月三日、ある人の家で、一日中花を見てくらしして、各人杯を取って詠んだ（歌）

桜の花を見る春は聞さえなかつたならば今日も日が暮れたと嘆かなかつたものを。

【語釈】○故^中左金吾家集 内題。源頼実の家集のこと。中^中は底

本では「備中」とあるが、藏人の唐名である「侍中」に訂した。「左金吾」は「左衛門督」の唐名。「侍中左金吾」で源頼実を指し、「故」(故人の意)とあるので、この集は他撰と考えられる。○ある人の家未詳。○花見くらしして 花を一日中見て、の意。○さかつきとりて 酒の入った杯を手にとって。○春はやみだに 春は闇さえの意。『古今集』春上、四一、躬恒の「春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」の歌以来、「春または春の夜」と「闇」がともに用いられる歌の伝統を踏まえ、「春はやみだになかりせば」と詠んだ。○なげかましやは 嘆いたろうか(嘆かなかった)の意。「まし」は反実仮想の助動詞。

三月十五日、しら川寺に五時かうに人くいきて、ふみなどつらねてのち、けふことにならずすべきよしを、かはらけとりてよみける

2 しら川のけふの契りをたがへずは春のみこふと人やおもはむ

【通釈】三月十五日、白川寺に五十講に人々が行って、漢詩など連ね

て後、今日は必ずすべき事を、酒杯を取りて詠んだ(歌)

白川での今日の約束を違えないならば、春だけ恋うと人は思うだろうか。

【語釈】○しら川寺 京白川にあった寺と推測されるが、詳細は未詳。○五時かう 五十講、のことか。五十講とは、『法華経』八卷二十八品を五十講座に分けて講義をする法会。○ふみなどつらねて 複数の男が漢詩を詠み合って。○けふことにならずすべきよし 五十

講の行われる今日特に行わなければならない私の誓いなどというか。○春のみこふと人やおもはむ 春の季節だけを恋い慕っていると人は思うだろうか、いや仏をも恋い慕っていると思うだろうよ、の意。

【参考】『為仲集』八九に「四月十日ごろ、平等院五十講のほど、慶暹阿闍梨宿坊にて、ほととぎすをまつ、といふだいをよみしに」という詞書で、「山べにもさなかざりけり郭公みやこに待ちしよひぞかかりし」の歌があり、平等院の五十講の記事が見えるが、それについて、『橘為仲集全釈』の著者石井文夫はその中で「五十講は比較的時代が下がってから行われはじめたようで、この例などは早い方に属するものと思われる。」と述べている。この白川寺での例も早い方であろう。

やまぶきをおりて、ある人の哥よみておこせたる
返し

3 めでにゆく人にもあらでわがやどにおりてぞ見つるやまぶきの花

【通釈】山吹を折ってある人が和歌を詠んでおくってくれたので、返歌(を送りました)。

井出に行くこともない私の家にあなたがおくってくれた山吹の花を家にいながら見ていることだ。

【語釈】○やまぶき バラ科ヤマブキ属の落葉低木。黄色の花をつける。古歌にも詠まれ、「かはづ(蛙)」と詠み合わされる。○めで 歌枕。京都府綴喜郡井出町。木津川に注ぐ玉川が流れている。湧水の豊かな土地で「井出の玉水」と呼ばれている。左大臣橘諸兄がこの地に別荘を構え、山吹の花を植えたと言われている。『古今集』では、井

出は歌枕であり、山吹と取り合わせて詠まれている。「蛙なく井出の山吹散りにけり花のさかりに逢はましものを」（『古今集』春下、一二五、よみ人知らず）などと詠まれる。○おりて「折りて」に「居りて」を掛ける。

長久二年源大納言家にて、**りむじ**におつる花を、しむといふだいを

4 ちるころはちるを見つともなぐさめつはななきはるのなをやのこらん
【通釈】長久二年源大納言の家で、「臨時に落ちる花を惜しむ」という歌題を

花が散っているころはそれを見ながら心を慰めた。花のまつたくない春でも心には花が残るだろうか。

【語釈】○長久二年 西暦一〇四一年。○源大納言 源師房（一〇〇八〜一〇七七）のこと。村上天皇の皇子具平親王の子。父具平親王を早くに亡くし、姉の隆姫女王の夫である藤原頼通の猶子となった。万寿元年（一〇二四）藤原道長の五女尊子を妻としたため道長や頼通と密接な関係を持った。漢詩や和歌にも優れ『後拾遺集』以下の勅撰集に一〇首入集する。自邸の土御門邸で歌会や歌合を催した。○**りむじ**におつるはなををしむ 「りむじ」が不明。底本は「にむじ」とあるが、ここでは「りむじ」と考えた。○なをやのこらむ 『源氏物語』柏木「いまはとて燃えむけぶりもむすほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ」の結句「なほや残らむ」と同じか。やはり残るだろうか、の意。

【参考】高重久美『和歌六人党とその時代』では、藤原範永の「庭の

「源頼実集」注釈稿上

うへのおつるはな 仁和寺」の詞書で詠まれた「春のひも身ぞさえぬべきちるはなのつもれるには、ゆきと見えつ、」（『範永集』三一）とともに、この歌は頼実の異母弟頼綱の叔父範永と頼実らの小規模な歌会で詠まれたものと推測されている。今のところその確証を持ち得ないが、仮にそうだとすれば、「りむじ」は「仁和寺」のことになる。これについては未詳とせざるを得ない。

しら川寺にて、花浮澗水題を

5 ながれつる瀧の水だになかりせばちりにしはなをまたもみましや

【通釈】白川寺で、「花、谷川の水に浮かぶ」という題を（詠んだ歌）流れている瀧の水さえなかつたならば、散ってしまった桜の花をまた見ることができだろうか。

【語釈】○しら川寺 未詳。京都の白川にある寺か。二番歌にも見える。○花浮澗水 桜の花が谷川（滝）の水に浮かぶ、という歌題。「澗水」は谷川、滝の水。白居易の「春至」の詩句「白片落梅浮澗水 黄梢新柳出城牆」（『和漢朗詠集』上、春）に想を得ての歌題か。

宮にて、はなによりて**を**おしむといふ題を

6 ゆくはるをおしむ心はちりのこる花みる人やのどけかるらん

【通釈】宮の邸宅で、「花によって春を惜しむ」という題で（詠んだ歌）過ぎ行く春を惜しむ心はなくならず残っている。散らずに今も残る桜の花を見る人は穏やかな気持ちでいることであろうなあ。

【語釈】○宮 祐子内親王のことか。後三条天皇第三皇女、母は藤原

源子（敦康親王女、頼通養女）。源子の死後、頼通に養育される。頼通の後見のもと「祐子内親王家歌合」を開催する。○はなによりて春をおしむ 桜の花によって春の季節の終わりを惜しむ、意。底本では「花」とあるが、他本により「春」と改めた。

【参考】『和歌一字抄』墨書補入歌四〇に「依花惜春」の詞書でこの歌が載る。

春の夜の月

7くもりなきそらもかすみにかすみつ、ひかりにあかぬ春の夜の月

【通釈】春の夜の月

曇りもない空も霞にかすんで光に満足しない春の夜の月であるよ。

【語釈】○そらもかすみにかすみつ、「かすみ」を二度繰り返す表現が良い。

【参考】「六条斎院歌合」三一、宣旨の歌「みるほど空に霞のへだつれば光にあかぬ春の夜の月」の下の句が共通する。この歌は『夫木和歌抄』春四、一五八四に「禊子内親王家歌合、霞月をへだつる」の詞書で載る。「光にあかぬ春の夜の月」の下の句は7の歌とこの歌のみに限定される。なお、この歌合は永承六年（一〇五二）正月八日に六条斎院禊子のもとでの歌合で、頼通が後見した。

源大納言家のねの日に

8ねの日してけふひきそむるひめ小松いくたび春にあはむとすらん

【通釈】源大納言家の子の日に

子の日に根が延びるように、今日引き始めたばかりの小さな松は、これから幾度春にめぐり逢うことだろうか。

【語釈】○源大納言 4の歌の語釈参照。○子の日 十二支の子にあたる日の、特に正月の最初の子の日、平安時代中期までは、若菜は正月七日ではなく、正月初子の日に行われていたため、若菜摘みのことを子の日、また子の日の遊びと呼んだ。この日に貴族たちが楽しむ遊びを指す。小松の根引き（小松引き）や若菜摘みなどが行われたが、これらは年頭にあたって、松の寿を身につけたり、若菜の羹を食して邪気を払おうとしたもの。その「子の日」に「根延び」を掛ける。○いくたび春にあはむとすらむ 幾度春に会うのだろうかと詠み、源大納言を言祝いでいる。

夏

夏日見る遠山雲

9なつ山のをちにたなびくしら雲のたち出てみねとなりけるかな

【通釈】夏 夏の日遠山の雲を見る

夏山の遠いところに棚引く白雲が立ち現れて峰となったことよ。
【語釈】○夏日見る遠山雲 夏の日、遠い山にかかる雲を見る、という歌題。あまり用例を見ない。○みね 峰に「見ね」を掛ける。

くひな

10た、くともしばしとちなんあまの戸はあくればかくるくひななりけり

【通釈】水鶏

(コンコンと戸を) 叩く音がするとしても少しの間閉じてしまおう。閉ざしていた戸(天の門)を開けてみたら、隠れてしまう水鶏であったことよ。

【語釈】○くひな 水鳥の名、クイナ。水辺に住み小魚を食べる。旧暦五月頃に鳴く。鳴き声が物をたたく音に似ることから、鳴くのを「たたく」という。「叩く」とて宿の妻戸を開けたれば人もこずゑの水鶏なりけり(『拾遺集』恋三、八二二、よみ人知らず)とある。○とぢなん 閉じてしまおう、の意。○あまの戸 ①天上の渡り通。「秋風に声をほにあげて来る舟は天の門渡る雁にぞありける」(『古今集』秋上、二二二、藤原菅根)に同じ。②高天原にあったとされる天上界への入り口の門。ここでは②か。『後撰集』恋二、六二二、よみ人しらずの「あまのとをあげぬあげぬといひなしてそらなきしつる鳥のこゑかな」に同じ。○かくる 底本は「かへる」だが、他本に従い「かくる」と改めた。「隠る」に(錠を)「懸くる」を掛け、「あくれば」とともに「戸」の縁語となる。

【参考】『詞花集』夏、六四に「土御門右大臣の家に歌合し侍りけるによめる 源頼家朝臣」の詞書で、「よもすがらたたくくひなはあまのとをあけてのちこそおとせざりけれ」の歌があり、趣向が似ている。源頼家は源頼光の次男で頼実の叔父、和歌六人党の一人として頼実らと歌会や歌合に出詠した。歌人としてともに詠作することからくるものか。

ほと、ぎす

「源頼実集」注釈稿上

11 ゆふやみになきてすぐなりほと、ぎすかへらんとときも道なたがへそ

夕闇の中鳴いて飛びすぎていったようだ。ほととぎすよ。帰って行くときも道を間違えるなよ。

【語釈】○ほととぎす カッコウ科の鳥。橘や卯の花とともに詠まれる。他に恋の歌で詠まれたり、あの世とこの世をつなぐ取り「死出の鳥」としても詠まれる。○なきてすぐなりほととぎす 「宮こ人ねでまつらめやほととぎすいまぞやまべをなきてすぐなる」(『道綱母集』三八)、「めづらしくなきてすぐなるほととぎすいづこもこれやはつねなるらん」(『下野集』一七三)、「ほととぎす鳴きてすぐなりなにはがたあしまの千どりしばしおとすな」(『為仲集』二三)のように用例が多い。

ある所にて、詠木下風

12 なつの夜は木のしたわたる風のをともゆふかげにこそすしかりけれ

【通釈】ある所で、「木下風」を詠む

夏の夜は木の下を吹きわたる風の音も夕かげこそ涼しいのであるよ。

【語釈】○ある所 未詳。○木下風 歌題としては珍しい。

【参考】結句を「すずしかりけり(すずしかりける)」と詠む例は、「さよかきいづみの水のおときけばむすばぬそでもすずしかりけり」(『後拾遺集』夏、二三三、源師賢)、「いつしかとあきのはつかぜふきぬれば心のうちはすずしかりけり」(『相模集』三五二)、「河かぜの吹きく

るばかりあらねども月みるほどはずしかりけり」(『為仲集』七) などの歌に見える。この時代以降流行した結句か。

ながをかにて、ほととぎすをまつといふ事を

13 ほととぎすきなかぬさきにあけにけりなどながつきにまたずなりけん

【通釈】長岡にて、「ほととぎすを待つ」という題を

ほととぎすが来て鳴かないうちに夜があけてしまった。どうして(秋の夜長と言われる) 長月を待たないで夜があけてしまったのか。

【語釈】○ながをか いまの京都府長岡京市。平安京の前、都が置かれた所。○ながつき 「なが」に「長岡」の「長」を掛ける。秋の夜長である「長月」を待たないで夜が明けたのかと、地名の「長岡」を匂わせつつ詠んだのである。

ほととぎすをきゝて

14 一こゑのおぼつかなきにほととぎすゝての後もねられざりけり

【通釈】ほととぎすの声を聞いて

一声だけでは満足できないのでほととぎすを聞いた後も寝られなかったよ。

【語釈】○一こゑのおぼつかなきに ほととぎすの一声を聞いただけでは満足でない、の意。

【参考】「ほととぎすまつほどこそ思ひつれききてのちもねられざりけり」(『後拾遺和歌集』夏、一九八、道命法師、『赤染衛門集』

四〇八)の歌と下の句が共通する。また、和歌六人党の一人、家経に「聞郭公」の詞書で「まちでもねられざりけりほととぎすなきなむのちと思ひしかども」(『家経集』四三三)の同趣の歌がある。

月夜ほととぎす

15 五月雨はおぼつかなきをほととぎすさやかに月のかけにきゝつる

【通釈】月夜のほととぎす

五月雨の夜は心もとないものよ、ほととぎすの声を明るくい月の光のもとで聞いたよ。

【語釈】○月夜ほととぎす あまり見られない歌題。○五月雨 陰暦五月ごろ降り続く長雨、梅雨。○おぼつかなき 「対象がはっきりせずつかみどころがない」が原義。○さやかに はっきりしている、明瞭である。○月 月が明るくい夜に詠まれた。

【参考】『躬恒集』一〇八「さみだれのつきのほかにみゆるよはほととぎすだにさやかにをなけ」(『玉葉和歌集』夏、三七〇)の歌に用いられている語が似る。躬恒の歌の影響があるか。

長久二年四月九日於源大納言家囿哥合事。左右方人各十人おとこ五人をんな五人

- 左 侍従乳母 宰相乳母 権弁 五節 中務 実範 頼家 重成 隆方 定家
 - 右 少将乳母 宰相 小弁 山城 大史 棟仲 義清 経衡
- 親範 頼実

三月ついたちのほどに題をたまはせたりけれど、ことしげき事にてけふまでなりたるにや

夏衣

16 みな人もけふやころもはかへつらんひとへになつのきぬとおもへば
此哥被撰^左一番。而右一番右衛門侍従哥云、式部権大輔拳周母
言經古き賢当時打者也。而有言の間被定持。取は世無恥願於身、
有愁願。令來者重而是非故書入此集乎。

（此の哥右一番に撰ばる。而して右一番は右衛門侍従哥と云ふ。式部権大輔拳周の母にて、古き賢と言經る当時の打者なり。而して言有るの間持と定めらる。取らるるは世に恥なく、身に願うは、愁願有るのみ。重ねて是非を来さしめ者り。故に此の集に書き入るるか。）

17 たちてゆく春をおしめど夏ころもきたるはこれもなつかしきかな

【異同】右（一番）―左か

【通釈】長久二年四月九日源大納言家で歌合の事があつた。左右の人は各々十人で、男五人、女五人である。

左 侍従乳母 宰相乳母 権弁 五節 中務 実範 頼家
重成 隆方 定家
右 少将乳母 宰相 小弁 山城 大史 棟仲 義清 経衡
親範 頼実

三月一日ころに歌題を下賜されたが、（その後）いろいろと用事が多いために（開催が）今日になったか。

夏衣

みな人も今日衣を更えたのだろうか、ひたすら夏が来たと思うので。

此の歌左一番に選ばれた。そして右一番は右衛門侍従の歌だという。（右衛門の侍従というのは）式部権大輔（大江）拳周の母にて、古き賢者と言われ続けている、当時の優れた歌人である。評定の言がありその結果「持（引き分け）」と定められた。選ばれたのは、世に恥のないことだが、わが身に願うのは、愁いの願意があるのみだ。重ねて（歌の優劣の）是非を決したいのだ。だからこの集に書き入れたのか。

立ち去っていく春を惜しむけれども、夏衣を着てみるとこれも心惹かれることよ。

【語釈】○源大納言家有哥合事 長久二年（一〇四一）四月九日、源

師房の土御門第で行われた歌合。「二十卷歌合」断簡によれば、同年四月七日の開催である。○侍従乳母 侍従乳母は大江拳周の姉（または妹）の江侍従か。○宰相乳母 藤原広業の女か。これであれば、藤原経衡の従姉妹。○権弁 未詳。○五節 『栄花物語』の「後悔大将」「玉の飾」「着るは侘びしと歎く女房」にその名が見える。「後悔大将」には「参河守方隆が女、衛門の大夫致方が妻」とある。岩野祐吉によれば、藤原方隆の兄方正の女で、右衛門尉平致方の妻となった女性であるという。方正は道長の家司で、その娘が教通の男子の乳母となり、三条天皇の中宮妍子の女房となる。妍子亡き後、上東門院彰子の女房となった。長元五年（一〇三二）十月十八日「上東門院彰子菊合」、長暦二年（一〇三八）晩冬「権大納言師房歌合」に出詠している。○

中務 藤原惟風の妻、惟経の母。三条天皇の中宮妍子の乳母。藤原瀧子かと推測されるが、これについては未詳。○実範 源実範のことか。○頼家 源頼家(生没年未詳)。頼光の男、母は平惟仲女。備中・越中・筑前守を歴任、藤原頼通家の家司であった。和歌六人党の一人。『後拾遺集』以下十首入集。右の歌合のほかに「橘義清歌合」「頼通家藏人所歌合」に出詠する。天喜元年(一〇五三)「越中守頼家名所歌合」を主催し、藤原道雅の「西八条山莊障子絵合」にも詠進した。○重成 源重成か。この重成は兼長のこと。「歌人備前讃岐守正五下右兵衛佐。本重成」と注がある。長久二年(一〇四二)四月七日「権大納言師房歌合」に出詠。○隆方 藤原隆方。(生没年未詳)。備中守隆光の男。『後拾遺集』に入集する。○定家 未詳。○少将乳母 未詳。底本には「母乳」とあるが、「乳母」と改めた。○宰相 未詳。○小弁 未詳。○山城 未詳。○大史 未詳。○棟仲 平棟仲(生没年未詳)。重義の男。周防、因幡守を歴任従五位上に至る。和歌六人党の一人。長暦二年(一〇三八)九月「権大納言師房歌合」に出詠、右の歌合で右の方人となる。○義清 橘義清(生没年未詳)。「橘義清歌合」を主催する。○経衡 藤原経衡(一〇五五―一〇七二)。増淵勝一は『経衡集』の「周防守通宗」に着目し、承暦元年(一〇七七)一〇月三日以降の没と推測する。参議有国の孫、公業の男。兵部少進筑前守となる。和歌六人党の一人。『後拾遺集』以下に一六首入集。「権大納言家歌合」「祐子内親王家歌合」道雅の「西八条山莊障子絵合」などに出詠する。ほかに後三条天皇の大嘗会に屏風歌、前関白頼通八十賀に賀歌、後三条天皇祇園行幸に東遊歌を献上する。○親範 源親範(生没年未詳)。

源道済の子。能因とも交流があった。○頼実 源頼国の三男。叔父の頼家と共に和歌六人党の一人。長元八年(一〇三五)に「関白左大臣頼通歌合」に出詠、源師房家の歌合にも出詠した。長久四年(一〇四三)藏人に補されたが、翌年三〇歳で死去。『後拾遺集』以下の勅撰集に七首入集。○ことしげき事にて 師房の多忙さを指すか。同年三月一日頃に歌題が下賜される兼題歌合であったが、様々な用事のために延引されたということか。○夏衣 夏に着る着物、ひとえの薄い着物。(枕詞)夏に着る衣がひとえで薄いことから「ひとへ」「薄し」に、夏の衣に用いる生地「縑(かとり)」と同音の地名「かとり」に、また「衣」の縁語である「たつ」「きる」「ひも」「すそ」などにかかる。○けふやころもは 二十卷歌合では「けふやころもを」とある。○ひとへに「偏えに」に「単衣」、「来ぬ」に「衣」をそれぞれ掛ける。「かへ」「ひとへ」「きぬ」は「ころも」の縁語。○右一番 左一番の誤りか。○右衛門侍従 左方人の一人侍従乳母を指し、二十卷歌合では「加賀」となる。○拳周母 赤染衛門(生没年未詳)を指す。赤染時用女。母は初め平兼盛と結婚していたので、実父は兼盛であると『袋草紙』に見える。大江匡衡との間に拳周、江侍従などをもうけた。『後拾遺集』入集は第四位の三二首である。長元八年(一〇三五)五月の「関白左大臣家歌合」、長久二年の「弘徽殿女御家歌合」などに出詠し晩年まで歌壇で活躍した。○言経古キ賢当時打者也 古くから賢者と言われ続け、さらに当代の優れた歌人、の意か。「打者」とは優れた人の意。○而有言の間被定持 (頼実は自分の勝ちだと思っていたが、いろいろと) 評言があったので「持」(引き分け)と定められた、の意。○

取らるるは世に恥なく、身に願うは、愁願有るのみ。重ねて是非を来さしめ者り。故に此の集に書き入るるか 右の歌合に自分の歌が採用されたのは歌人として恥のないことであるが、我が身が願うのは「持」となったことに対する）私の愁いをはらすことだ。重ねて歌の優劣に決着を付けたい。だからこの集に書き入れたのか、の意。「取らるるは世に恥なく、身に願うは、愁願有るのみ。重ねて是非を来さしめ者り。」は頼実の思いであるが、「故に此の集に書き入るるか」は後人の推測を書き入れたものか。書き入れた人物は不明である。○たちてゆく… 侍従乳母すなわち加賀の歌。「たちて」は（夏が）立ちてに（衣を）裁ちてを掛ける。「なつかしき」の「なつ」に「夏」を掛ける。「たち」「き」は「ころも」の縁語。

款冬

18 ①とゞしくも（本ノマ、）やまぶきはにははなんはるさへふかくさけるしるしに

【通釈】やまぶき

非常に（ ）山吹は匂ってほしいものだ。春までも咲いている証拠に。

【語釈】○①とゞしく 底本には「ひと、しく」とあるが、「いとどしくの誤り」と考え改めた。○（本ノママ） 二字欠字。他本により「やへ」を補う。

ふぢのはな

「源頼実集」注釈稿上

19 ときはなるまつにかゝれるふぢの花ちとせの春にほふべきかな

【通釈】藤の花

永遠に変わらない松にかかっている藤の花であるよ。千年の春に匂うに違いないな。

【語釈】○松に藤 藤原氏の栄華を言祝いでいる。この時代流行の言祝ぎか。

【参考】少し時代が下るが、『後拾遺集』賀、四四〇、藤原顕房が「ちとせふるふたばのまつにかけてこそふぢのわけえははるひさかえめ」と詠み、白川天皇の第一親王である敦文親王の五十日の祝いで、親王の長寿を願い、藤原氏の栄華を言祝いでいるのと似て、本歌も「ときはなるまつにかかれるふぢの花」と言祝ぎ、「ふぢの花」すなわち藤原氏を言祝いでいるのである。

卯花

20 うのはなのさかりすぎなん山ざとはすむ人やみの心地こそせめ

【通釈】卯の花

卯の花の盛りが過ぎてしまった山里では、そこに住んでいる人は（卯の花が散ってしまった）悲しい気分になるのだろうか。

【語釈】○卯花 ウツギの花。初夏に鐘状の小さい花が集まって白く咲き乱れる。「卯の花」は陰曆四月に咲くので、四月を「卯月」という。梅と鶯の関係と同じく、「ホトトギス」との組み合わせで、卯の花が咲き、ホトトギスが鳴くと夏が来ると考えられ、人々にめでられた。一面に白く咲き乱れるので、雪にたとえられることもある。○心地こ

そせめ 心地がする意。『躬恒集』二二三八の「さくらばなちりなむのちはみもはてずさめぬるゆめの心地こそせめ」の歌以来、「心地こそせめ」という歌句が用いられた。『後拾遺集』夏、一七三、よみ人しらずの「月かげをいろにてさけるうのはなはあけばありあけの心地こそせめ」が「うのはな」「心地こそせめ」と二語が共通している。

葵

21けふみればかけてかへらぬ人ぞなきあふひそ神のしるしなりける

() 可被撰入勝了

【通釈】葵

今日見ると、どの人も葵をかけて帰っている。その葵こそ神の印であるのだなあ。() 撰入せられ「勝ち」となる。

【語釈】○葵 五月一日(中の酉の日)に行なわれる賀茂神社の例祭である葵祭では、参列者や諸用具に葵を飾る。○かけてかへらぬ葵を牛車に、身に掛けて家に帰っていく、の意。「かけ」は「あふひ」の縁語。○神のしるし 賀茂神社の御印のこと。『輔親集』九五の「ゆふだすきかけはなれたるころあれば神のしるしにあふひとあらじ」の歌と同じく「あふひ」と「神のしるし」とが詠まれている。○() 可被撰入勝了「葵」の歌に関する付注か。二十巻歌合では、「持」となっている。

【参考】本歌合、十番右の歌。また、『後葉集』雑四、五六九、『統詞花集』神祇、三六一、結句「しるしなるらん」で採られ、『和歌一字抄』夏一、二四八七にも載る。

早苗

22五月雨をまたばさなへやおひぬべき水ひくたごのいそがしきかな

【通釈】早苗

もし五月雨を待つのならば、待っている間に早苗は成長してしまふにちがいない。田んぼで水を引く田子(農夫)は忙しいのだらうなあ。

【語釈】○早苗 苗代から田へ移し植える頃の稲の苗。○おひぬべき成長するにちがいない、の意。「おひ」は「おい」が正しい。

【参考】この歌は、『夫木和歌抄』夏一、二五九一に「家集、早苗源頼実」の詞書で採られる。また、『和漢朗詠集』下、五七〇、『古今和歌六帖』第二、一一二の貫之の「ときすぎばさなへもいたくおひぬべしあめにもたごはさはらざらなむ」の歌と、「雨」「さなへ」「おひぬべし」「たご」の語が共通する。頼実の歌はこの貫之の歌を踏まえていると思われる。

ほと、ぎす

23ほと、ぎすきなく道だにしろからばあふさかまでもゆくべきもの

【通釈】ほととぎす

ほととぎすが来て鳴く道だけでも明らかであるならば、逢坂までも行つて、逢うことができるのに。

【語釈】○あふさか いまの滋賀県大津市逢坂。山城国と近江国の境となっていた逢坂関、標高三二五メートルの逢坂山(関山とも)がある。また近くには、国境周辺で最高峰である音羽山があり、ともに歌

枕である。

【参考】『古今集』夏、一四二、紀友則「音羽山けさこえくれば郭公
こずゑはるかに今ぞなくなる」、同集、離別、三八四、紀貫之「音羽
山こだかくなきて郭公君が別れをしむべらなり」の歌のように、「ほ
ととぎす」は「音羽山」とともに詠まれたが、頼実より後、『金葉集』
夏、一二四、源定信「わぎもこにあふさかやまのほととぎすあくれば
かへるそらになくなり」、『忠盛集』一六四「みちすがらたづねてゆけ
ばほととぎすけふもはつねにあふさかのせき」の歌のように「ほとと
ぎす」に「逢坂山（関）」が配されるようになる。音羽山と逢坂山は
隣接するが、歌の世界では流行の時期が異なるように思う。

くひな

24ふるさととはとひくる人もなかりけりた、くくひなのをとばかりして

【通釈】 くいな

古里は訪ねて来る人もないことよ。水鶏の鳴き声だけが聞こえて
（悲しいことだ）。

【語釈】 ○ふるさと 本来、昔何かあった土地、の意。旧都や、昔な
じみの土地、などの意に広く用いる。○とひくる 訪ねてくる、の意。
「と」に「戸」を掛け、「くひな」の縁語とする。

呉竹

25こちくるをわがともとのみみゆるかなよをへてかぜのをとしたえねば

【通釈】 呉竹

「源頼実集」注釈稿上

近づいて来るような物音は、私の友人と思われて仕方がない。夜
通し、風の音がずっと続いているのだから。

【語釈】 ○こちくる 「こち」は近くの意。「ちく」に「竹」を詠み込
む。物名の歌。○よ 竹の節と節の間を表す「よ」を掛ける。

【参考】『和漢朗詠集』巻下、藤原篤茂（あつもち）の詩に「唐太子
賓客白楽天 愛為吾友」とある。篤茂は白居易の「池上竹下作」にあ
る「水能性淡為我友 竹解心虚即我師」を曲解して「愛為吾友」とし
たと考えられているが、白居易はしばしば竹を詠んでいるので、一概
に誤りとは言えない。この歌は篤茂（あつもち）の句を踏まえて詠ま
れたものか。

潺湲

26かきながす水もにごろぬやどなればうつれる月のかげさへぞすむ

【通釈】 潺湲（さらさらと流れる水）

かき流す水も濁らぬ屋戸であるので映っている月の光まで澄んで
いるよ。

【語釈】 ○潺湲（せんかん・せんえん）さらさらと流れる水。ある
いはその様。○水 「ながす」「にごろぬ」「すむ」は「水」の縁語。

四月ばかりに夜ふけて女のもとにいひやりける

27まぢこひてき、やしつるとほと、ぎす人にさへこそはまほしけれ

【通釈】 四月のころ、夜更けて女性のところに手紙を遣った。

待ち恋しくて、（あなたは）聞いたかほととぎすの声を、せめ

て人にだけでも尋ねたいものよ。

【語釈】○まちこひて ほととぎすの声を聞きたいと強く思い待っていて、の意。

【参考】初句が「待ちわびて」となり、『風雅集』夏、三一六に「四月ばかり人のもとにいひやりける」の詞書で本歌が採られる。

(いりあひをききて)

28 くれはてし人のまれらになるまゝ、にいりあひのかねのこゑはきこゆる

【通釈】入相の鐘を聞いて

辺りが暗くなって、人の出入りがまばらになった。入相の鐘の音だけが聞こえる。

【語釈】○いりあひ 他本に従い、「いりあひをききて」を補う。入相の鐘で日没の頃つく鐘。また、その音。「いりあひのかね」の語は、この歌のほか到大江匡房が「いとどいとどいりあひのかねのかなしきにしでのたをさのこゑきこゆなり」(『江帥集』六三三)と詠んだのみで、嚆矢の時代といえるのではないか。○まれらに めずらしい、まれなこと。まれらは「天の河よはふけにつつさぬる夜のとしのまれらにただひとよのみ」(『人丸集』八八)の歌以来詠まれたが、「人のまれらに」の表現は『頼実集』に限定される。

棟仲が家にてなでしこをよむ

29 とこなつにつゆをきわたるあさぼらけにしきにたまをうけてこそみれ

【通釈】棟仲の家で「瞿麦」を詠む

常夏(瞿麦)に露が一面に置いている夜明けどき、錦が玉を受けているように見える。

【語釈】○棟仲 16の歌の語釈参照。○なでしこをよむ 歌題のひとつ。『経衡集』一五の「うすくこくかきねにほふなでしこのはなの

いろにぞつゆもおきける」(『詞花集』夏、七一にも採られる)に歌語が共通する。○とこなつ 夏から秋にかけて長く咲くことから、なでしこの古名となる。

【参考】『千載集』時代の歌人であるが、源有房は「はんげんそうづの歌合に、あめのうちのなでしこいふことを」という詞書で、「とこなつをつゆもてかざるむらさめはにしきにたまをそへてみよとや」(『有房集』一〇二)と詠むが、歌題は「なでしこ」に対して「あめのうちのなでしこ」と微妙に異なるが、よく似た歌となっている。頼実の歌が影響を及ぼしたか。

氷室

30 ^條なつの日になるまでとけぬ冬こほり春たつかぜやよきて吹らん

【通釈】氷室

夏の日になるまで溶けない冬氷である。立春の日の風は(氷を)避けて吹くのだろうか。

【語釈】○氷室 冬の氷を夏まで蓄えておく室。

【参考】『後拾遺集』夏、二二二に「氷むろをよめる 源頼実」の詞書で「なつのひになるまできえぬふゆごほり春たつ風やよきてふきけん」と見えるが、第二句が「なるまできえぬ」で異同が見られる。

草むらにむかひて秋をまつといふ題を、六月廿日のほどに

31秋をまつ花をほりうへてみる人はなつをすぐすぢさしかりける

【通釈】「草むらに向かつて秋を待つ」という歌題を、六月廿日の頃に

秋を持つ花を掘り植えて、それを見る人は夏の季節を過ぎすのが
久しくなることであるよ。

【語釈】○草むらにむかひて秋をまつ 他の例を見いだせない歌題。

○六月廿日 晩夏の半ばすぎ。○秋をまつ花 夏の花。○ひさしかりける 貫之の「松風はふけどふかねど白浪のよする岩ほぞ久しかりける」以来、比較的詠まれた歌句。

秋

中逢秋

32秋かぜはまだ夏ながらふきにけり月のたつをもなにかまつべき

【通釈】秋 (夏の) 中に秋に逢う(という歌題で)

秋風はまだ夏であるが吹いている。月が経つのをどうして待つことが
とができるだろうか、(いや待てない。早く秋本番となつてほしい)

【語釈】○秋 これより秋の歌が続く。○中逢秋 夏の中なのに秋の
風物に逢つた、という意の課題。○夏ながら まだ夏であるが、の意。

○なにかまつべき 結句によく用いられる表現。「よそにかくこふべき
身とし知りぬれば久しき千代を何か待つべき」(『輔親集』九七)、「
朝夕にたへなるのりを読む君は世世の後をも何か待つべき」(『定頼
集』一三〇)など。

山家早秋

33秋たちてかど田の稲もうちなびきをとめづらしき秋のはつ風

【通釈】山家の早秋(という歌題で)

秋になって門田の稲もなびいているその音の心引かれる秋の初風
であることよ。

【語釈】○かど田 門前の田。または門の近く(屋敷地の周り)にあ

る田。『万葉集』で「妹が家の門田を見むとうち出来し心も著く照る
月夜かも」(巻八・一五九六・家持)などと古くから詠まれる。源経
信の「夕されば門田の稲葉おとづれて葦のまる屋に秋風と吹く」(『経
信集』、『金葉集』秋・一七三)のように詠まれる。○をとめづらしき
経信の歌「稲葉おとずれて」とあるように、稲葉と稲葉が秋風のため
に擦れ合つて微かな音を立てるその音に心が引かれるということ。ま
た、「乙女」を詠み込むか。

【参考】『和歌一字抄』墨書補入歌二六に第二句「かど田の稲を」で
頼家の歌として載る。

秋月

34はつ秋のそらさへす^{ナマ}しき月かげは人のこゝろもすみまさりけり

【通釈】秋の月(という歌題で)

初秋の空までも涼しげな月の光を見ると人の心もいっそう澄むこ
とであるよ。

【語釈】○す^{ナマ}しき 傍注に「本ノマ、」と見える。「そらさへす^{ナマ}
しき」という表現を不審に思い、傍注を付したか。同様な表現を用い

た歌に「夏の日の暮れゆく空の涼しさに秋のけしきを空に知るかな」

〔和歌一字抄〕九五八、義孝伊勢守とあり、他に一首があるが、稀な表現である。○人のこゝろもすみまさりけり「久方の月のくまなき秋の夜は人の心もすみまさりけり」〔新千載集〕三九五・権大納言長家）他一首が取っている表現で、あまり用例はない。

【参考】「久方の月のくまなき秋の夜は人の心もすみまさりけり」の歌は、34番歌と全く下の句が同じである。権大納言長家は、頼実と同時代の歌人であるため、この二首に何らかの関係があるものと見てよいか。

毎夜見月

35 さやかなる月のみやはながめつるくもりし夜はまたれし物を

【通釈】毎夜月を見る（という歌題で）

はつきり見える月だけを眺めたのではない。曇りの夜も待ち遠しいもので（心の中で月を思い眺めているよ。）

【語釈】○月のみやは 月の宮を掛けるか。傍に「日カ」とあり、「月日のみやは」かとする。○またれし物を 恋の情調がある歌か。

七夕後朝

36 まつほどのひさしからずはたなばたのけさのわかればなげかざらまし

【通釈】七夕の後朝（という歌題で）

待った時間が長くないのであれば七夕の（逢瀬の後の）今朝の別れを嘆くことはないだろうに。（二年もの長い間待ったのだから、

今朝の別れを嘆く気持ちにはひとしおであるよ。）

【語釈】○七夕 旧暦七月七日の節会。牽牛星（彦星）と織女星（織姫星）が天の川を隔てて北の空に並ぶのを、中国では人間の逢瀬に見立てて、一年に一度だけめぐり合うものとした。この中国の七夕伝説が恋の物語として、乞巧奠の儀式をともなつて伝来、日本の機織女をめぐる古来の神事の習俗と融合する。○後朝 夜を共にした男女の翌朝の別れを言う。○まつほどのひさしからずは 彦星と織姫星との逢瀬は一年に一度で、長い時間逢瀬を待つものであるのが現実であるのを反転させる反実仮想の手法。○けさのわかればなげかざらまし 今朝の後朝の別れの嘆きはひとしおである、という意味。反実仮想の典型的な手法である。

八月十五日に大学頭義忠にさそはれて遍照寺にまかりて、「池上の月」といふ題を

37 あかなくにあまつそらなる月かけをいけのホにうつしてぞみる

【通釈】八月十五日に大学頭の義忠に誘われて遍照寺に行つて、「池上の月」という歌題を

まだ満足していないので、大空いっぱいには照り映えている月の光を池の上に映して見ていることよ。

【語釈】○大学頭義忠 藤原義忠（一〇〇四～一〇四一）。大和守藤原為文の子。東宮学士、大学頭、大和守を歴任。大学頭在任期間は未詳。万寿二年（一一二五）「義忠家歌合」を主催、長元六年（一一三三）正月、藤原頼通邸で行われた「子日の宴」で和歌序を作成、長久二年

(二〇四一)「弘徽殿女御十番歌合」では判者を務めるなど歌人としても有名であった。後一条天皇、後朱雀天皇即位時の大嘗会和歌作者。

詩は『本朝統文粹』に、和歌は『後拾遺集』以降に採られる。○遍照寺 いまの京都市右京区嵯峨広沢にある遍照寺のこと。境内には広沢池がある。○いけの この下三字分欠字か。○あまつそら 大空。

【参考】『金葉集』秋、一六七、「遍照寺にて秋晩のこころをよめる 藤原範永朝臣」の詞書で、「すむ人もなきやまざとの秋の夜は月のひかりもさびしかりけり」の歌があり、和歌六人党の一人である範永も「遍照寺」にて「月」を詠んでいて興味深い。

八月十五夜、権大納言家、月似晝題を

38秋の夜のそらにくまなき月かげはなげきやすらんかつらぎの神

【通釈】八月十五夜、権大納言家に「月の光は昼と同じ」という歌題を

秋の夜の空に暗いところがなく照っている月の光を嘆くのだから
か葛城の神は。

【語釈】○権大納言家 4の歌語釈参照。○月似晝 月昼に似る。月の光が明るいので、昼の明るさと同じ、という意。○かつらぎの神 大和の葛城山に住むとされる神。一言主神。役の行者の命令で葛城山と金峰山との間に久米の岩橋を架けることになったが、容貌の醜いのを恥じ、昼を除く夜しか働かなかつたのでそれが完成しなかつたという伝説から、男女の契りなどの物事が成就しないと、顔の醜い者などの例に引かれる。この歌は後者に当たる。「大納言朝光下らふに

「源頼実集」注釈稿上

待りける時、女のもとにしのびてまかりて、あか月にかへらじといひければ 春宮女蔵人左近 いはばしの夜の契りも絶えぬべしあくるわびしき葛城の神(『拾遺集』雑賀、一二〇二)の歌があるが、同じ趣向である。

【参考】本歌は『和歌一字抄』下、九四九に、「月光似昼」の詞書で、第二句が「くまなくそらの」で採られる。

また、本歌の歌題「月似晝」に似た題である「秋月如昼」では藤原隆経の「きくのうへ露なかりせばいかにしてこよひの月をよるとしらまし」の歌がある。

殿上人、夜ふけてにはかにしら川へなんいくとてくるまよせさ
そふにまかりて、白川の秋月といふだいを

39くる人にくたびあひぬしら川のわたりにすめる秋の夜の月

【通釈】殿上人たちが、夜更け急に白川へ行くといって、(我が邸に)牛車を寄せて誘うので行つて、「白川の秋月」という題を

来る人に幾度も出会った。白川のあたりに居て、この澄んだ秋の夜の月を見るために。

【語釈】○殿上人 昇殿を許された者。誰であるか不明。また複数であろう。○しら川 洛北、洛東を流れる鴨川の支流。○くる人 白川から見る月は名物で、多くの見物客があつたか。その見物客を指す。「くる」に「くるま」の「くる」を掛けるか。○わたり 川を渡りの意を掛け、「川」の縁語とする。○すむ 「澄む」に「住む」を掛ける。

【参考】『後拾遺集』春上、一一九、伊賀少将の「高倉の二宮の女房、

花見に白川にまかれりけるに、よみ侍りける」の詞書で、「なにごと
も春のかたみに思はまし今日白川の花見ざりせば」の歌があり、同集、
春下、一四六、土御門右大臣（源師房）の「白川にて、花の散りて流
れけるをよみ侍りける」の詞書で、「ゆく水をせきとどめばや白川の
水とともにぞ春もゆきける」の歌があり、花見の名所でもあったこと
が知られる。

七月十二日に宮の前栽ほるに、花契千秋といふだいを

40あきごとと花をみやこにほりうへてけふぞちとせのはじめなりける

【通釈】七月十二日宮の前栽掘りをした時に「花千秋を契る」とい

歌題を

毎秋花を都の宮様の邸に掘り植えて今日の日こそ永遠の齡の始め
であるのだなあ。

【語釈】○宮 6の歌の語釈参照。○前栽ほる 邸の庭の植え込みを
掘り、花を植えること。○花契千秋 花千秋を契る。花の寿命を千年
とすることを約す、という意。○みやこ 「みやこ」に「宮」を掛ける。
○けふぞちとせの 花の永遠なる寿命を言い、宮の長寿を賀す。

聞鹿声

41秋ごとにつまこひわびてなく鹿はきりたつ山やふしうかるらん

【通釈】鹿の声を聞く（という歌題で）

秋が来るたびに妻を慕い嘆いて啼く鹿は、霧の立つ山で独り伏す
のがつらいと思っっているのだろうよ。

【語釈】○聞鹿声 鹿の啼き声を聞く、意。

【参考】『人丸集』一一四「このごろの秋のあさけの霧隠れ妻呼ぶ鹿
の声のさやけさ」に「秋」「妻」「鹿」「霧」「啼くまたは声」で共通す
る。

聞搗衣

42あきかぜにこゑうちそふるから衣たがさと人としらずもあるかな

【通釈】衣を搗つを聞く

秋風に唐衣を搗つ音が加わっていく。（砧を搗つのは）里人の誰
であるのかわからないことよ。

【語釈】○搗衣 布を柔らかくしたり艶を出したりするために砧の上
で衣を叩くこと。古代中国の秋の習慣。李白の「子夜呉歌」、「長安一
片月 萬戸搗衣聲 秋風吹不盡 總是玉關情 何日平胡虜 良人罷遠
征」は特に有名で、戦争に行った夫の帰りを待ちながら妻が衣を搗つ
ものと考えられた。○あきかぜにこゑそふる 秋風の吹くなか、ある
家から衣を搗つ音がする、その音に別の家から同じ音が加わるとい
うこと。李白の「萬戸搗衣聲」を和歌に詠みかえた表現。○たがさと人
としらずもあるかな 白居易の詩「聞夜砧」の「誰家思婦搗衣聲」を
詠みかえた表現。『和漢朗詠集』にも見える。○から衣 李白や白居
易などの唐の詩人を思い出させる仕掛け。

【参考】白居易「聞夜砧」の全句を挙げる。

誰家思婦搗衣聲 月苦風淒砧杵悲 八月九月正長夜 千聲萬聲無
了時 應到天明頭盡白 一聲添得一莖絲（『白氏文集』卷十九）

『和漢朗詠集』三四五に第三句・第四句が採られる。

後日見花

43あさぎりを野べにわけつるかひもなしけふさへ花にあかでくれぬる

【通釈】後日花を見る

(今日) 朝霧を野辺に分けて入ることは甲斐もない。今日までも満足することなく日が暮れてしまふことよ。(だから後日花を見るのである。)

【語釈】○後日見花 他に見えない歌題。『和歌一字抄』に採られている歌の詞書のように、「後日」は「終日」の誤りか。

【参考】『和歌一字抄』補の一九に「終日見花 頼実 朝ぎりをのべにわけつるかひもなしけふさへ花にあかでくれぬる」と同歌が載る。歌題は「終日見花」とあり、歌意からするとこの方が自然か。

見庭萩

44あをやぎのえだばかりにもはるくればに^にたるはななきやどの萩萩

【通釈】庭の萩を見る

青柳の枝だけにでも春が来れば似ている花のない家の秋萩よ。

【語釈】○あをやぎ 春になって青々と芽をふき始めた柳。○にたる 底本には「わたる」とあるが、他本に従い「にたる」と改めた。○萩 「青柳」とあるが、異本から「秋萩」と改めた。

ながをかになかつかさの宮などおはして一夜とまり給ひてあり

〔源頼実集〕注釈稿上

しに、もみぢをよめる五首

45くれなゐにふもとの川のうつるまでみねのもみぢのふかくもあるかな

【通釈】長岡に中務宮などがいらつしゃって一晩お泊まりになられた時に、「紅葉」を呼んだ五首

紅色にふもとの川が映つて見えるまで峰の紅葉の色の深い色であることだなあ。

【語釈】○長岡 13の歌の語釈参照。ここに頼実の別荘でもあったか。○中務宮 この時代、「中務宮」と呼ばれた人物としては敦平親王(九九九〜一〇四九、三条天皇第三皇子、一〇二三年一月以降一〇三〇年一月在任確認)、昭登親王(九九八〜一〇三五、花山天皇第二皇子、一〇二八年二月以降薨去まで在任確認、敦貞親王(一〇一四〜一〇六一、敦明親王の男、一〇三六年一月以降一〇五〇年三月在任確認)の三人が確認される。頼実(一〇一五〜一〇四四)の年齢と、敦貞親王は頼実と交流した源資通妹の夫であることを勘案すると、この中務宮は敦貞親王と考えてよからう。○五首 ほかの四首は伝わらない。○ふかく 深い紅色を表現し、「川」の縁語となる。

野花

46かへるさはいそがれぬかなはなの香のひをへてかはる野辺にきぬれば

【通釈】野の花

帰るときは急がれないことであるよ。花の香りが日々変わってゆく(秋の)野辺に来てみると。

【語釈】○かへるさは 帰る時、帰りがけ。「さ」は接尾語。○いそ

がれぬかな 急がれないことよ、の意。○はなの香 花の香り。異本に「花の色」とある。○ひをへてかはる 日を経るにつれて変化する、の意。

旅雁

47そらにのみこゑのきこゆるかりがねはあまのかはらにやどやかるらむ

【通釈】旅の雁

そらにだけ声が聞こえてくる雁がねは天の河原に旅の宿をとつて
いることであろうか。

【語釈】○旅雁 能因法師の私撰集『玄玄集』一四六の「旅雁 小一条院 春はゆく秋はこち来るかりがねははなに紅葉をまさるとやおもふ」の歌のように、歌題「旅雁」が見える。○かりがね 雁の異名。

○あまのかはらに 「あまのかはら」に「かりがね」を合わせているところが斬新で本歌の眼目である。

【参考】『古今集』羈旅、四一八（『伊勢物語』の「かりくらしなばたつめにやどからむあまのかはらに我はきにけり」の歌を踏まえ、「天の河原」に「かりがね」を配したのが斬新である。

鹿

48夜をかさね鹿のねたかく聞ゆなりこはぎかはらやしほれしぬらん

【通釈】鹿

幾夜も続けて鹿の鳴く声が高く聞こえてくるようだ。小萩の生えている原は露に濡れているだろうか。（鹿も妻を求めて涙を流し

ていることだろうか）

【語釈】○こはぎ 小萩。萩の美称。

【参考】本歌は『相模集』三五六の「宮ぎののこはぎがはらになくしかのなみだのつゆにしほれしもせじ」の歌と同趣の歌で、相模の歌を踏まえた歌か。

秋霧

49川ぎりはをちみえぬまでたちにはけりいづれかよどのわたりなるらん

【通釈】秋霧

川霧が遠くが見えなくなるほどにかかってしまったなあ。どこが淀の渡りであろうか。

【語釈】○をち 遠いところ。遠方。○よどのわたり 「よど」は京都市伏見区田町名。桂川、宇治川、木津の三つの川が合流する辺りの名。○わたり 渡し場。

【参考】「川ぎり」と「淀」を詠んだ歌は、『長能集』一八二の「とりつなげみづのはらはなれこまよどのかはぎり秋はたえせじ」の歌が古い例か。ほぼ同時代の匡房も「みやこをば秋とともにぞ立ちそめし淀の川霧いく夜へだてつ」（『江帥集』一六九、『新古今集』離別、八七六）と詠む。定頼の「朝ほらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬瀬のあじろ木」の歌のように、「宇治川」の「川霧」を詠む例は多いが、本歌のような取り合わせは少ない。源頼実の和歌の特徴のひとつとして『和歌文学大事典』の「頼実」の項において高重久美氏は「聴覚など感覚が鋭敏で、「門田の稲」など表現に新鮮さが見られ、

叙景歌に勝れる。」と指摘している。確かに、今回、講読した五十二首のうち「おと」「こえ」「なく」「きく」など聴覚に関連する言葉の登場する作品は十五首であり、約三割にのぼっている。この点については、比較対象歌人を誰にするかによって印象は変わるが、頼実が意識して作品の中に「音」を詠み込んでいることを窺うことができるように思う。これに付言すると頼実の和歌からは「韻律」に対する細やかな意識を読み取ることができる。たとえば、四十九番歌を見てみたい。この一首自体は「秋霧」の題詠としては伝統的な詠みぶりの作品といえよう。同時に、この作品の特徴のひとつとして、「川霧」といえば「宇治」というイメージから離陸して、「淀」という歌枕を詠み込んだ点にも工夫を見ることができると。また、韻律を見てみると、初句の「川ざり」、二句目の「をち」、三句目の「たちにけり」、四句目の「いづれ」、結句の「わたり」と「イ段音」の言葉を各句に配置して、一首のリズムを整えていることが読み取れる。この他にも一番歌「はなをみるははやみだに」の「ハ」の音。四番歌の「ちるころはちるを見つつも」の「チ」の音。七番歌の「かすみにかすみつつ」の「カ」の音。このような韻律上の工夫を随所に見ることのできる和歌がいくつも確認できるのである。頼実の作品の観点のひとつとして注目すべきひとつではないだろうか。

右大弁の家にて九日翫菊

50をいせじとおもてくにごへどもしもいたゞけるしらぎくの花

【通釈】右大弁の家で「九日菊を翫ぶ」という題で

「源頼実集」注釈稿上

老いるまいと顔を、また顔を拭うけれども霜を頂ける白菊の花の
ような（我が頭よ）

【語釈】○右大弁 右大弁の役にあつたのは、長暦二年（一〇三八）は藤原経輔、長暦三年（一〇三九）以降、頼実が没した寛徳元年までは源資通であった。頼実の交流を考えると、この右大弁は源資通（一〇〇五〜一〇六〇）と考えてよからう。○九日翫菊 九月九日重陽（菊）の節句に菊を翫ぶの意の歌題。○をいせじ「おいせじ」。老いるまい、の意。この時代までにはほかに見えない歌句。○しもいたゞけるしらぎくの花 この二句が連続する例はほかに源賢法眼（九六五〜一〇二〇、源満仲の男。源信の弟子となる。）の「いかでかはおいせぬ物といひおきしもいたゞけるしらぎくの花」（『源賢法眼集』三四）の歌のみである。

【参考】同座詠とは思えないが、頼実と交流のあつた藤原定頼（公任の男）の歌に、「九月九日、ひねもすにきくをもてあそぶといふこと」の詞書で「夕露のおくまで菊をみつるかなおもてのしわをのこひつるより」の歌がある。

二十代の頼実が「しもいたゞけるしらぎくの花」と詠んだとすれば、歌の出来映えは良いが、皮肉として聞こえる歌ではないか。

むめづに四条中納言などおはして、ゆふぐれにふねにのりて、
あしの花雪のごときといふ題を

51きしによるあしかりをぶねなかりせばゆきとのみこそみるべかりけれ

【通釈】梅津に四条中納言などがいらつしやって、夕暮れに舟に乗っ

て、「芦の花は雪のようだ」という歌題を

岸に寄せる芦刈をする小さな舟がもしなかったとしたら、（この
白い芦の花を）雪と見ることができたことよ。

【語釈】○梅津 いまの京都市梅津付近、桂川左岸の地。水陸交通の要衝で、桂川を利して、丹波材の陸揚地であった。○四条中納言 藤原定頼（九九五〜一〇四五、公任の男）。妹（公任女）が教通の妻であったことから、頼通に近く官界でも歌壇でも重んじられた。長元元年（一〇二八）五月一六日「高陽院水閣歌合」に出詠する。『後拾遺集』以下に四六首入集している。○あしの花 水辺に生えるイネ科の多年草。秋に穂を付ける。しだいにその色が白くなる。○あしかりをぶね刈った芦を運ぶ小舟。

【参考】承保二年（一〇七五）八月に開催された「撰津守有綱歌合」に出詠された遠江前司の「難波がたあしかり小船なかりせば水にきえせぬ雪とこそみめ」の歌が本歌と趣を同じくする。『新編国歌大観』有綱歌合の解題で、上野理は「秋の季題と恋題の小規模な歌合で、おそらく有綱が側近の者を集めて行った歌合であろうが、和歌六人党の作風に通じる作歌水準の高い作品を集めており、和歌史上注目しに値する。」と述べる。この遠江前司が誰か不明だが、本歌の影響を受けているか。

梅津の地には、本集73の歌の詞書「右大弁のさそひ給ひしかば、むめづにまかりて、河辺水秋夕風」とあるように、源資通らも訪れ詠歌をものしている。和歌六人党周辺の歌人たちの詠作活動が想像される。

うちのせざいほりに

52このへにうつしうへつるしるしにはひさしくにはへ野辺の秋ははぎ

【通釈】内裏の前栽掘りに（詠んだ歌）

宮中に幾重にも移植したその証としていつまでも美しく咲け秋萩
よ。

【語釈】○うち 内裏。○せざいほり 前栽掘り。○このへ 宮中の意と幾重にも意味を掛ける。○ひさしくにはへ いつまでも美しい花を付けよ、といいながら内裏の主人である帝を言祝いでいる。○秋はぎ 原本には「かぜ」とあるが、文意及び他本から「はぎ」と改めた。